

## 「第61回パグウォッシュ会議『長崎宣言』を踏まえて」

鈴木 達治郎

11月1日(日)～5日(木)まで、長崎市(やすらぎ伊王島および長崎大医学部記念講堂)で初めて開催された「第61回パグウォッシュ会議世界大会」は、最終日に「長崎宣言」(英文: <http://pugwash.org/2015/11/05/2015-nagasaki-declaration/>) (和訳: <http://pugwashjapan.wix.com/pugwash-nagasaki2015#blank/qn09u>) を発表して無事終了した。大会の組織委員長として、会議開催にご協力いただいた方々に厚くお礼申し上げたい。長崎で開催することになった要因の一つが、RECNAの存在であったことは間違いなく、あらためてRECNAの存在意義を再確認する大会となったことをまず申し上げたい。

組織委員会としては、大会開催の意義として、何よりも「被爆地長崎で学び、感じ、発信する」を掲げた。今回発表された「長崎宣言」はまさにその趣旨を生かすべく作成されたものである。

まず、「長崎宣言」は「長崎を最後の被爆地に」から始まる。冒頭は、被爆地で開催した大会の特徴、特に遺構訪問や被爆者の講話をうかがった印象が強く反映される文章となった。冒頭バラの最後は「被爆者の声に耳を澄まし、世界の政治指導者に対し、被爆者の叫びを受け止めるよう強く訴えます」と強調している。

次のパラグラフは「核兵器の脅威が今も増大しています」に始まり、核兵器転用可能な核物質在庫量の増大などを明記し、「核兵器が法的に禁止され、廃絶されるまで」、核兵器利用のリスクが常に存在していることを述べている。

第3パラグラフでは、核兵器国、非核兵器国に対する要請が書かれている。核兵器国に対しては、最も重要なこととして、核兵器の削減にとどまることなく、「核兵器の廃絶を確約しなくてはならない」としている。一方で非核兵器国、特に拡大核抑止(核の傘)に依存する非核兵器国に対し、非核兵器地帯への参加・創設などを通して「自身の安全保障政策を変革しなければならない」と要請している。

第4パラグラフは、最近の核軍縮・不拡散をめぐる国際協議の場の限界を示し、新たなアプローチが必要なことを述べている。特に「国々と市民社会、国際組織が連携して核兵器の法的禁止を目指す全世界的イニシアティブ」が重要な役割を果たす、としている。

第5パラグラフでは、長崎で開催するもう一つの大きな意義として挙げた「福島第一原子力発電所事故の教訓」が述べられている。福島原発事故以降、2011年、2013年と2回のパグウォッシュ大会が

開催されており、事故の教訓についても議論が続けてきた。しかし今回は、「原子力技術に伴



長崎宣言を発表するパグウォッシュ評議会 2015年11月5日  
提供:パグウォッシュ会議

うリスクを封じ込める」のみならず、飛躍的に進展する科学技術のリスクについても言及し、「おそらく今日、科学者の社会的責任はかつてないほど重要なものになっています」と、パグウォッシュ会議の理念の一つでもある科学者の社会的責任の重要性に言及している。

第6パラグラフでは、パグウォッシュ会議のもう一つの重要な理念である「対立を超えた対話」について述べている。地域の緊張が軍事対決につながらないよう「あらゆるコストを払って軍事衝突を回避しなくてはなりません」と述べ、「究極的に戦争そのものをこの地球上からなくさなくてはならないのです」と述べている。

最後のパラグラフには、もう一度長崎開催の意義が明確に示されている。広島、長崎の被爆者のみならず、核実験で被ばくしたヒバクシャの経験も次の世代に伝承していくことが「決定的に重要」と述べ、さらに「長崎市民と被爆者の声を分かち合いながら、きのこ雲の下で起こった惨劇が深く刻み込まれたこの地から」訴える、としている。そして宣言は、ラッセル・アインシュタイン宣言の著名な次の一節で終わる。

「あなたがたの人間性を心にとどめ、そのほかのことを忘れよ」

この宣言を踏まえ、パグウォッシュ会議としても東アジアグループを新たに設置するなど、次の大会を目指してすでに活動が始まっている。日本パグウォッシュ会議の活動も充実させることが検討されており、RECNAとしても、北東アジア非核兵器地帯の設立などパグウォッシュ会議の活動とも連携を強化していく所存である。

(すずき たつじろう、RECNAセンター長)

### パグウォッシュ会議

### トラック2の可能性

広瀬 訓

長崎で初めてのパグウォッシュ会議が開催され、RECNAも鈴木センター長以下、多くの関係者が参加した。その内容と、そこで発表された「長崎宣言」については、パグウォッシュ会議のサイトおよび鈴木センター長の記事を参照していただくとして、ここでは、「プロセスとしてのパグウォッシュ会議」について少し触れたい。

私自身が「パグウォッシュ会議」を知ったのは、高校の社会科学の教科書の記述であった。大学教員となり、多少なりとも大学入試にも携

わるようになって、あらためて高校の社会の各科目の教科書を参照すると、「パグウォッシュ会議」は健在であった。しかし、日本の高校教科書に載るほど有名なパグウォッシュ会議ではあるが、その発端となった「ラッセル・アインシュタイン宣言」とその後のパグウォッシュ会議でいくつかの宣言が発表されたことを除けば、具体的にどのような成果を挙げたのか、私もそれほど知識はなく、また、教科書にもその活動内容について詳しい記述が載っていたわけでもなかった。

しかし、今回自分が参加したことにより、パグウォッシュ会議の挙げた成果が今一つはっきりしない理由、あるいは、「はっきりさせてはいけない理由」が私なりに理解できた。パグウォッシュ会議の開催が間近に迫り、各国からの参加者たちが伊王島に到着するにつれ、私が抱いたのは、期待よりもむしろ困惑であった。それほどパグウォッシュ会議の参加者は多岐にわたっていたのである。これまでも各種の国際会議や外交交渉の場で激しく意見の対立を繰り返してきたメンバーも数多く含まれ、果たしてこのような参加者の顔ぶれで、どこまで建設的な議論が進められるのか、正直なところ不安であった。それにもかかわらず、次々と到着する参加者たちは皆なごやかに挨拶を交わし、近況を尋ねあうなど、極めて友好的な雰囲気が醸し出されていった。

それぞれのセッションや分科会においては、やはり取り上げるテーマがいずれも微妙な問題をはらんでおり、しばしば意見の対立が見られたことは事実である。しかし、それが建設的な議論の妨げになることはなかったと言っても良い。そして、最も印象的だったのは、パオロ・コッタ＝ラムジー事務局長の報告であった。そこでは、実際にパグウォッシュ会議が重ねてきた努力とその成果が語られ、その内容は私が想像していた以上であった。また、他の参加者からも、「実はA国の〇〇とB国の××は、以前から民間の会議／フォーラムを通して交流があり、それぞれが代表として交渉に臨んだことで、この問題は解決へ向けて大きく進展した」という種類の報告もあった。

このような非政府レベルでの交渉は、しばしば「トラック2」とも呼ばれている。ちなみに「トラック1」とは政府間での正式な交渉である。この「トラック2」とは、通常単なる民間交流ではなく、いずれ正式に政府間交渉への移行を視野に入れての非公式なレベルでの接触、前交渉という性格を持つものである。パグウォッシュ会議は、民間の会議ではあるが、この「トラック2」の色彩を強く持つものであった。そのため、そこで具体的にどのような内容の議論が行われたのか、あまり広く公表され

ていないのである。公表されるのは、交渉が正式に成立した時であり、その時には関係国の政府が前面に出るた



The 61st Pugwash Conference on Science & World Affairs  
Nagasaki's Voice: Remember Your Humanity  
1-5 November 2015, Nagasaki, Japan

長崎平和公園に集合した参加者  
2015年11月1日 提供:パグウォッシュ会議

めに、やはりパグウォッシュ会議の果たした役割は陰に隠れがちである。しかし、それこそがパグウォッシュ会議の役割なのである。その意味では、パグウォッシュ会議は「プロセス」であって、それ自体で結果を出すものではないと言えるだろう。特に軍縮や安全保障に関する問題は、その交渉の途中で内容を公にできない場合も多い。パグウォッシュ会議は、これまでその部分で、大きな貢献をしてきたと言ってよい。そして、これからも大きな貢献を続ける可能性を持っている。ただし、その「プロセス」は外部からは見えにくいだろう。それでも、パグウォッシュ会議が開催されているということは、そこに国家や民族、イデオロギーを超えて、平和と軍縮につながる交渉の糸口を見出そうとする多くの人々がいるという確かな証なのである。

(ひろせ さとし、RECNA副センター長)

## 第9回「国際学生・ヤングパグウォッシュ会議」

### 長崎世界大会の開催

榎本 浩司

#### ヤングパグウォッシュ会議

パグウォッシュ会議直前の10月30日(金)、31日(土)の2日間、長崎市やすらぎ伊王島において、第9回国際学生・ヤングパグウォッシュ会議世界大会「広島・長崎被爆70年-軍備管理、軍縮・不拡散の見通し」が開催された。

国際学生・ヤングパグウォッシュ会議(International Student and Young Pugwash, 以下ISYP)は、ラッセル・アインシュタイン宣言に基づくパグウォッシュ会議の精神を踏まえ、核兵器の廃絶や科学者の社会的責任について、専門分野の枠を超えて若手研究者が議論を行う会議である。1970年代後半に北米から始まった学生・ヤングパグウォッシュは、その後国際的なネットワークに拡大し、1990年代後半にISYPが組織された。以来、パグウォッシュ会議の世界大会が開催される年などに合わせて国際会議を開催してきた。

ISYPの世界大会では、世界中から集まった若手専門家が2日間寝食を共にしながら、核兵器の問題を始め、地域の安全保障問題や最新技術と戦争の問題など、現在の国際社会が直面する幅広い課題について議論を交わす。世界大会は、こうした濃密な議論を通して参加者が専門的知見を深めるだけでなく、自然科学と社会科学の枠を超えた同世代の横のつながりを世界中に広げる貴重な機会となる。また、ISYP世界大会の参加者が、直後に開催されるパグウォッシュ会議に参加し、各分野の第一線で活躍する専門家の議論に触れることで、ラッセル・アインシュタイン宣言の精神を次の世代に伝えていくという役割も

担っている。

被爆70年の節目の大会となった今回のISYP世界大会には、19カ国から31名が参加した。2日間のセッションにおいては、参加者が事前に提出した論文について報告を行い、それらを踏まえた議論が行われた。報告のテーマは地域問題、信頼醸成、市民社会、原子力の平和利用等の多岐にわたり、幅広い切り口から核軍縮・不拡散や安全保障の問題についての議論がなされた。地域問題に関しては、欧州・中東・南アジア・北東アジアについて、各地域の二国間関係を踏まえた地域安全保障の議論や、信頼醸成措置、核不拡散レジーム等についての議論が交わされた。また、核軍縮・不拡散分野のNGOを始めとする市民社会の役割については、世代間をつなぎ、次の世代に核兵器の問題を伝えていく役割が重要になっているとの指摘がなされた。2日目のセッション終了後には、平和資料館内において日本非核宣言自治体協議会被爆70周年事業との共催で、日本全国から集まった核軍縮問題に関心を持つ若者及びRECNAサポーターを含む地元長崎の若者と、ISYP世界大会参加者との対話イベントが開催された。日本各地で核兵器や戦争の問題について行われている取り組みを語る若者の姿に、ISYP世界大会参加者は熱心に耳を傾けていた。全員が小グループに分かれて核廃絶に向けた取り組みについて意見を交わした際には、時間を越えて活発な議論が行われ、その後行われた長崎主催懇親会の場で日本と世界各国からの参加者が熱心に語り合う姿が多く見られた。

パグウォッシュ会議の最終日に行われたISYPについてのセッションにおいて、「2015年国際学生・ヤングパグウォッシュ：長崎からの声明-未来に向けて共に行動を-」と題する声明を提出した。これは参加者が被爆70年の節目の年に被爆地長崎で議論し、若者との対話や被爆者の方々の話を聞いた中で考えたことを踏まえて大会期間中にまとめられたもので、今日の国際安全保障上の課題に取り組むためにISYPが今後進む方向を示し、これからの時代を担う世界中の若い世代に呼びかけるメッセージとなっている。

今回のISYP世界大会は、1995年と2005年の広島での世界大会に続く日本での開催であり、長崎では初めての開催であった。被爆者の高齢化が進んでいる中で、世界各国から集まった若い参加者たちが直接被爆者の話を聞くことのできる機会は他では替えることのできない貴重なものであり、実際、多くの参加者が初めて「キノコ雲の下で何が起きたか」についての話に直接触れ、大きな感銘を受けていた。また、そうした被爆体験を次の世代につなぐ取り組みを進めている若者たちとの交流を通して、将来への希望を感じるとともに、ISYPとして若い世代が長崎を最後の被爆地とするために取り組みを続けていくことへの想いを新たにしていた。会議は2日間を通して大変内容の濃い充実したものとなり、今大会を節目の年に長崎で開催できた意義は大きい。その意味では今大会はメディアの関心も高く、報道を通してISYPが国内において少し認知され

たことも前進であったと言える。他方、日本国内の学生・ヤングパグウォッシュ体制はまだ小さいため、今大会の成果と反省を最大限に活かして裾野を広げ、継続的に活動できる体制を作るための取り組みも喫緊の課題である。



ヤングパグウォッシュ会議の成果の報告 2015年11月5日  
提供：パグウォッシュ会議

(えのもと こうじ、日本パグウォッシュ会議2015年長崎世界大会実行委員)

## 国連総会第一委員会

## 国連作業部会を設置

中村 桂子

12月7日、第70回国連総会は、第一委員会(軍縮・安全保障)を通して57の決議および決定を採択した。これらには、昨今の核兵器の非人道性に関する議論の高まりを受け、今年初めて第一委員会に提出され注目を集めた複数の決議も含まれた。紙幅の関係で、ここでは、メキシコ、オーストリア、南アフリカなど22か国が共同提案した決議案(「多国間核軍縮交渉を前進させる」(A/RES/70/33)。以下、「OEWG決議」)※について、その概要ならびに意義を紹介したい。

4月～5月の核不拡散条約(NPT)再検討会議では、全会一致の成果文書こそ生み出せなかったものの、核兵器禁止の法的議論については一定の前進が図られた。議長による最終文書案では、同年の国連総会にて法的条項を含む第6条完全履行のための効果的措置を特定し明確にすることをめざした「オープンエンド(公開)作業部会(OEWG)」の設立が勧告された。米国代表からは、この点を含めて核軍縮関連の内容に合意の意向があった旨が示唆された。

この流れを汲んだ形で、10月20日に第一委員会に提出されたOEWG決議案は、「核軍縮実現のための具体的かつ効果的な法的措置、とりわけ核兵器のない世界の達成と維持のための新たな法的条項や規範について合意に至ることを目指した交渉を行う」ための公開作業部会を設置することを求めた。具体的には、2016年にジュネーブで、最長3週間(15労働日)にわたって開催されること、国連総会の下部機関としてその手続規則に則ること(これはすなわち全会一致方式ではなく、多数決で決定することを可能にしている)、NGOや市民社会の参加や貢献が期待されていること、同年の国連総会に勧告を提出すること、等が述べられている。

第一委員会での議論を経て、決議案の文言にある「交渉を行う(negotiate)」が「実質的に協議する(substantively address)」に修正されるなどの一定の妥協は図られたが、いずれにせよ核兵器禁止に向けた法的議論の前進に繋がり得る「場」が設置された意義は大きい。

決議案は、11月5日に第一委員会で、12月7日に国連総会本会議で、前者が賛成135、反対12、棄権33、後者が賛成138、反対12、棄

権34のそれぞれ賛成多数で採択された。両方ともに、5核兵器国とイスラエルは反対、インド、パキстанは棄権、北朝鮮のみ賛成であった。米、英、仏は共同で発した投票説明の中で、核保有国抜きでも核兵器禁止の動きを進めていくべきとする考えがこの決議案の背景にあるとして、強い警戒感を示した。その上で、「核兵器の禁止はNPTを損なわせる危険を孕んでいる。NPTが発効し普遍的になる以前の世界、すなわち多くの地域が核拡散の危険性にさらされ、不確実性と不信が核エネルギー平和利用へのアクセスを阻んでいた時代のように、世界は今よりはるかに不安定なものとなる」と、従来通りの「ステップ・バイ・ステップ」アプローチの重要性を強調した。日本(棄権)を含め、拡大核抑止力に依存する国々もいずれも反対あるいは棄権票を投じた。オーストラリアは棄権理由として、こうした協議には核保有国の参加が不可欠であると、OEWGではその点が見込めない旨を述べた。

2013年に実施されたOEWGの例をとれば、2016年の2月～3月に一度目の会合がもたれ、その後断続的な協議を経て、8月頃の会合で国連総会に向けた勧告案が採択される、という流れが考えられる。議長国などの詳細はまだ発表されていない(2013年はコスタリカであった)。前回のOEWGの大きな特徴は、NPT関連会議などと比較しても、市民社会からのより大きな関与が可能であった点であり、今回も同様の公開性が期待されている。被爆者、市長らが発言の機会を得ることも十分考えられる。また、作業文書の提出等を通じ、市民社会の様々なアクターが具体的な政策提言を行い、議論の実質化、豊富化に貢献していくことが極めて重要となるだろう。

※「多国間核軍縮交渉を前進させる」決議を含めいくつかの重要な国連決議の日本語訳はRECNAホームページ「市民データベース」に掲載されている。<http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/recna/database/document/no3>

(なかむら けいこ、RECNA准教授)

# RECNAの活動

2015年10月1日～2015年12月31日

- 10月5日(月) ■第2回国連「核兵器の全面的廃絶のための国際デー」記念講演会  
-講師:平岡秀夫氏、朝長万左男氏  
-場所:長崎市立図書館多目的ホール
- 10月6日(火) ■国連軍縮フェローシップ参加の各国若手外交官と交流会(鈴木センター長、広瀬副センター長、中村准教授、レクナサポーター)
- 10月12日(月) ■ウズベキスタンの学生とレクナサポーター交流会(中村准教授、レクナサポーター)
- 10月16日(金) ■上海、復旦大学で行われた「The East Asian Security Seminar」において「Regional Security Challenge- Proposal on A Comprehensive Approach toward Nuclear Free Northeast Asia」報告(広瀬副センター長)
- 10月17日(土) ■平成27年度核兵器廃絶市民講座 第4回「パグウォッシュ会議長崎大会を控えて -若者と語る」  
-講師:小沼通二(慶応義塾大学名誉教授元パグウォッシュ会議評議員)
- 10月27日(火) ■ソウルにて「2015Northeast Asia Peace and Cooperation Initiative Forum」参加(広瀬副センター長)
- 10月31日(土) ■学生向けイベント「米政府高官と学生の意見交換会」(レクナサポーター)  
■学生向けイベント「ヤングパグウォッシュの参加者との意見交換会および懇親会」(主催:日本非核宣言自治体協議会)(レクナサポーター)
- 11月1日(日) ■イベント「戦争体験の継承や平和発信をよりよいものにするために」(レクナサポーター)
- 11月1日(日) ■第61回パグウォッシュ会議国際大会(朝長顧問、黒澤顧問、調副学長、鈴木センター長、梅林客員教授、広瀬副センター長、中村准教授)
- 11月11日(水) ■ブリュッセルにて「EU Non-proliferation and Disarmament Conference」参加(鈴木センター長)
- 11月14日(土) ■経済外部文化祭にて「若者宣言」発表、ナガサキ・ユースの活動展示(中村准教授、レクナサポーター)
- 11月25日(水) ■長崎県立長崎東高校SGHインタビュー(鈴木センター長)
- 11月29日(日) ■ナガサキ・ユース代表団4期生第1回説明会
- 11月30日(月) ■ナガサキ・ユース代表団4期生第2回説明会
- 12月1日(火) ■シンガポールにてNuclear Security and Riginal Fuel Cycle Choices会議参加(鈴木センター長)
- 12月2日(水) ■長崎県立北松西高校生権講座「身近な平和を考える」(広瀬副センター長)
- 12月4日(金) ■ナガサキ・ユース代表団4期生第3回説明会
- 12月10日(木) ■参議院外交防衛委員会調査室訪問(鈴木センター長、徳永専門職員)  
■学生向け勉強会「川崎哲さんと語る会」(中村准教授、レクナサポーター)

- 12月15日(火) ■東京大学本郷キャンパスにてRECNA研究会「衛星リモート センシング技術の核軍縮・不拡散への応用」(鈴木センター長、広瀬副センター長、中村准教授)
- 12月19日(土) ■特別市民セミナー「核兵器と戦争の根絶を目指して」  
\*特別講演「サステナビリティ学の視点から見た平和と繁栄 -立命館大学国際平和ミュージアムの今後を考える」  
-講師:モンテ・カセム教授(立命館大学国際平和ミュージアム館長)  
\*パグウォッシュ会議報告  
-講師:鈴木センター長

## お知らせ

### 日程変更のお知らせ

先にお知らせしておりました平成27年度第5回核兵器廃絶市民講座ですが、予定しておりました2月13日ではなく**3月5日(土)**に変更になりましたのでご注意ください。時間の変更はありません。詳細は以下のとおりです。

平成27年度第5回核兵器廃絶市民講座  
「原子力の平和利用と核不拡散-プルトニウムを考える」  
-講師:鈴木 達治郎 (RECNAセンター長)  
-場所:国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館 交流ラウンジ地下2階  
-時間:13:30-15:30  
※事前申込不要/受講料無料

### RECNAホームページ更新のお知らせ

2016年1月6日(水)に北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)によっておこなわれた水爆実験について、RECNA3教員(鈴木、広瀬、中村)による解説を掲載しております。どうぞご覧ください。

「北朝鮮の核実験をうけて:解説と見解」  
<http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/recna/topics/12704>

※ニュースレターを電子版でお受け取り御希望の方は、  
下記メールアドレスへ御一報下さいますようお願いいたします。

**RECNA ニュースレター**  
長崎大学核兵器廃絶研究センター

第4巻3号 2016年1月15日発行

発行 長崎大学核兵器廃絶研究センター  
〒852-8521 長崎市文教町1-14  
Tel. 095-819-2164 Fax. 095-819-2165  
E-mail. [recna\\_staff@ml.nagasaki-u.ac.jp](mailto:recna_staff@ml.nagasaki-u.ac.jp)  
<http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/>

印刷 株式会社インテックス

©2015長崎大学核兵器廃絶研究センター